

平成 27 年度第 2 回小牧市男女共同参画審議会会議録

1 日 時：平成 27 年 11 月 5 日（木）午後 1 時 30 分～

2 場 所：小牧市まなび創造館 研修室 2

3 [出席者]

委 員：代田義勝、松田照美、宮崎康弘、平林克之、大鹿幸子
近藤正司、牧とよ子、林千代子、市川紀六、伊藤幸子

事務局：舟橋教育部次長、船橋館長、坪井係長

平野主事

[欠席者]

なし

[傍聴者]

1 名

4 議 題

(1) 「はばたけ未来へ」改訂にかかる意見について

(2) 小牧市職員への女性登用状況について

(3) 審議会委員及び行政委員会委員への女性登用状況について

(4) 平成 26 年度小牧市男女共同参画推進状況について（最終報告）

5 その他

1 開会

[船橋館長]

皆様、本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。
平成27年度第2回小牧市男女共同参画審議会を開会させていただきます。

2 挨拶

[舟橋教育部次長]

皆さん、本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。
今年度は本日が第2回目となります。前回の会議後も、郵送等でいろいろご意見を伺いました。ご協力いただきありがとうございます。

本日は、ご意見をいただいた「はばたけ未来へ」の改訂についてご協議をいただくことと、昨年度のハーモニーⅡに従って実施してきました男女共同参画の推進状況をご報告させていただきたいと思っております。

また、来年度以降のハーモニーⅢの検証方法についてもご意見等いただくことになると思っております。限られた時間ではございますが、忌憚のない御意見をいただきますよう、どうぞよろしく願いいたします。

[船橋館長]

ありがとうございました。

本日、委員の欠席はありません。また、傍聴者は1名です。

なお、本日の会議は公開とし、後日ホームページ及び情報公開コーナーで公開させていただきます。

それでは早速議題に入っていきます。

代田会長に取り回しをお願いいたします。

3 議題

(1) 「はばたけ未来へ」改訂にかかる意見について

[代田会長]

それでは、よろしく願いいたします。

まず、議題(1)「はばたけ未来へ」改訂にかかる意見について。

前回審議会の二つの議題のうち一つが、この「はばたけ未来へ」の改訂でした。

前回皆さんから出していただいたご意見は、データと写真については最

新のものにし、表現が古いところは直すこと。また、先生方の男女共同参画に関する知識や関心については様々であることから、先生方が使いやすいようなものにしてはどうなのかというご意見もありました。

その後に、皆さんからページ毎にさまざまな意見をいただいております。これをページごとにまとめていくというか、どういうふうな形にしていくかを今日検討していきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

では、資料をごらんください。まず1ページ目ですが、5人の方からご意見をいただいております。

野球の部分についてですが、野球よりもむしろ指導的な立場、あるいは責任のある立場への挑戦のほうが良いのではとのご意見がありました。

料理の部分については、料理って今は男性も普通に料理をする方が多くなっていますし、家事育児関連の方が良いのではとのご意見ですね。さらに、料理を作るお父さんは珍しくなくなってきているが、お弁当を作るお父さんはまだ珍しいのではないかとこのことで、「お弁当を作るお父さん」はどうだろう、ともいただいております。

上部のメッセージでは、5年生ならジェンダーという言葉を使用しても問題ないのではないかとのご意見がありました。

あと、近藤委員からは、本質的なといえますか、少し議論が必要なご意見をいただいたと思います。

今ご意見をいただいている方、あるいはそれ以外の方でも、この1ページについて、こういう思いで書いたであるとか、あるいは意見を出してはいないけれどこうしたいというご意見があればお聞きしたいと思っております。

[近藤委員]

自分の意見の補足ですけれども、そもそも学校での対象になる学年は何年生ですか。

[平野主事]

5年生です。

[近藤委員]

そうなんです。自分はスポーツをやっていますので、その経験上からお話しさせていただきますと、思春期というのが一番色々とのびしろが多

い時期なんですね。その時期にやらないと、大人になってからやろうと思ってもなかなかできないんですよ。

そういう点から、「男らしさ」「女の子らしさ」じゃなくて、この時期は何でも広い範囲でみんなに体験してもらおう方向での考え方でとした時に、「らしさ」とか「女の子」「男の子」って誇張し過ぎているのではないかという意味で書かせてもらいました。

だから、女子が野球をやってはいけないなどということではなく、何でもやりたければやらせてあげるという方向で、基本的な部分で考えたらどうなのかなと思います。そこが全ての面で少しひっかかりを覚えました

[代田会長]

あえてここでは女子に野球はということですね。あるいは、料理にお父さんという形で。

[近藤委員]

関係ないと思います。我々が男女共同参画を推進しようと考えていったときに、こんな啓発はまだ小学生にはする段階ではないのではと。

[代田会長]

そうすると、こういう冊子は小学生には要らないと。

[近藤委員]

要らない。極論を言えばそういうことですね。

今言ったように、小学生の間は本当に広い視野でいろんなことを体験することが大事だと思うんです。この時期が一番大事な時期であって、いろんなことをやらせてあげたい。

今は町内でも役員をやっていまして、子ども会も関わっているんですけども、今の子って男女の差にそこまでこだわっていないように感じます。もっと自由に、女の子も男の子も同じように遊んだり、いろんなことをやっていますし、あえて聞くことではないかなと。

[代田会長]

なるほど。こういったご意見についてはいかがですか。

[宮崎委員]

逆に、こういった形のものを出したとき、野球は女性がやってはいけないのかなと思ってしまうことのほうが怖いですね。

[近藤委員]

「男のものだ」と感じてしまうのではないのでしょうか。

[松田副会長]

先入観を植えつけちゃうとでもいいですか。

[宮崎委員]

野球ではなく、上に立つという将来的なものであれば良いのではないのでしょうか。

[近藤委員]

確かに指導者は一番大事なところですよ。スポーツの世界でも、指導者一人で全く変わりますからね。

[市川委員]

今、私が意見を出す際に意図した部分を宮崎委員におっしゃっていただきましたけれども、私はどちらかといえば、狭い部分にとらわれるよりも、子ども達自身に自分たちがどこを目指していきたいんだと気づいてくれるような形にしてほしいと思います。

そういう意味で私は、全体を通して、子どもたちに、例えば日本以外にも違う国があって、違う文化があるというようなことも伝えていけたら良いと思うんです。もっと世間に目を開いてもらうような、自分たちは今こうだけれども、もっと世間に目を向けようではないですかというようなことを問いかけるような形でありたいと考えています。

[代田会長]

この「はばたけ未来へ」を作った際、私も審議会委員として関わっていました。確か審議会委員から二人、あとは小学校の先生と中学校の先生と7、

8人ほどで作った記憶があります。

そのときの発想でも、どうしても子ども達をこういう方向へ持っていこう、こういう方向へ持っていこうといった発想で作っているものですから、非常にかた苦しい形になってしまって、そこを突き抜けていないわけです。子ども達をまさに誘導しようと、バイアスをかけようとしてしまった。そういう意味では、この冊子も今の時代にそぐわないかもしれませんし、根本的に問い直したほうがいいのかもわからないですね。

[近藤委員]

そう思いました。

[代田会長]

いろいろなところで皆さんご指摘がありましたけれども、例えば写真のところでも、わざと少ない性のほうの写真を載せたり、今見るとやはり違和感を覚えてしまいますよね。

[近藤委員]

おかしいなと思いました。

[代田会長]

それをやるのなら、もう一回作り直すという発想でやる必要があるかもしれませんね。

確かに、もう少し古い感じがします。従来の小学校5年生を想定していて、かなり小さいころからすり込みされた小学校5年生、男の子にしても女の子にしても、それを想定しているので、今の子ども達は少し違うかもしれないですね。

[近藤委員]

今の子は違うと思いますね。

[牧委員]

そうですね。私も小学校の5年生に向けた出前講座に行きました。「はばたけ未来へ」を中心に、最後は、就職するならどういう職がいいですか、

自分は何に就きたいかということで、いろんな職業を選んでいいんだよということでもとめたのですが。

今のお話を聞いて、やはり小さいころから、海外ではこうですよ、日本は今こういうような状態ですよってということも伝えることは必要かなと思いました。今の子どもたちも、これをつくった最初のころに比べて随分成長しています。

[近藤委員]

そうですね。

[牧委員]

周りの時代背景も随分変わってきています。

[大鹿委員]

感覚的には同意見です。例えば料理にしても、父親が作る場合母親が作る場合どちらも普通になっているということもここにも書いたのですが、先日いただいた市民意識調査を見ると、実態は家でご飯を作るのはやはりお母さん、給料を持ってくるのはお父さんというところが多数派でした。内容をしっかり確認したわけではないですが、意識調査の結果を見ると、私の思っている子どもたちの現状というか感覚と、現実の小牧市民の生活の中では、やっぱりちょっとずれがあったかなということを感じました。

そういった意味でも、実態を踏まえた上で子どもたちがさらに先のことを見据えるような、そんな方向に持っていけたら良いと思いました。

[代田会長]

難しいですね。

[宮崎委員]

家庭環境は多分それぞれ違うので、余計に難しいですね。私の家では、土日のご飯の時間になると、子どもは「ご飯まだ」と私に言いますね。土日の食事は私の当番なので。多分私の家でこの調査をすると、ご飯は誰が作るのかは、「休みの日はお父さんがやる」と書くのかなと思いますね。

[近藤委員]

自分は大須で育ったのですが、大須はすごく下町で、その世界で育っているとその世界だけになってしまうんです。未だに僕の同級生なんかはそうなんですよ。

それが当たり前で育っているから、お母さんは専業主婦で、といった感じが続いてきて、当たり前になっているんです。その当たり前は当たり前で良いとは思いますが、やはり外にはこういう世界があるよということを伝えたい。

僕も 20 年、子育て、主夫、自営業も全部自分で体験しています。幼稚園の送り迎えも、バスじゃなくて幼稚園まで歩いて行き、お迎えもしたりしました。学校の行事も、中学校になれば対外試合にも全部連れていくこともやっていました。だから奥さんの大変さもよくわかるつもりです。そういうことをわからないとなかなかこの辺のところは難しいところだと思うんですけれども、当たり前という感覚を打破しないと、今言われたような点は難しいんじゃないでしょうか。

[代田会長]

どうでしょうか。

これはいつまでに作るのですか。

[平野主事]

今年度、来年度に 5 年生になる子の分を作りまして、毎年大体 3 月末に学校に納品してもらおう形をとっております。

[代田会長]

そうなると、全部作りかえるとなると大変なことになりますね。

[伊藤委員]

スウェーデンなどの海外の現状とかの資料もあつたほうが良いかなと思います。

[代田会長]

あるいは、これで残せるところを残して、追加で入れ替えていくという

のは。

[林委員]

中学校 2 年生も、「はばたけ未来へ」を使うのですか。

[平野主事]

いえ、小学生だけです。

[林委員]

これはあくまでも 5 年生を対象とした副読本として作るわけですね。

[代田会長]

今回改訂すると、また数年は同じものを使う形になりますよね。

[平野主事]

その予定です。

[船橋館長]

一つ提案させていただきます。いろいろ訂正という前提でご意見をいただいておりますので、今回この「はばたけ未来へ」がすぐわなくなっている部分について、訂正した分をとりあえず今年度の改訂という形にし今回見直した版を来年度いっぱいにかけて、全面的に見直していくという方法もあるかと思えます。

[松田副会長]

もう時間がありませんね。

[代田会長]

もう 11 月ですからね。3 月に納品しなければならないとなると、とても間に合いませんね。

では、今回はベースは今までのままで皆さんのご意見をもとに見直す、来年度以降、全く新しいものという形にしましょう。

そうすると、1 ページ目は残したほうがいいでしょうか。あるいは、少

し変えるなら、「野球」や「料理」を責任ある立場であるとか、あるいは「お弁当」などの表現に変えていく形になりますね。

メッセージの部分は、ジェンダーという言葉を使ったらどうかということですね。説明の仕方が難しいですが。

[近藤委員]

ジェンダーの説明を入れて、こういうことを今はジェンダーと言いますよといった説明くらいでいいと思います。

[代田会長]

そうしましたら、「野球」ではなく、議員や社長などといった責任ある立場に変えて、かつ「料理」については「お弁当」に変える形で。ジェンダーという言葉については、必要性があれば近藤委員のご意見のとおり説明を入れるということですね。

続いて2ページ目に入ります。

ここですと、近藤委員から「女らしく」「男らしく」というのは大事なことだというご意見がありました。

[近藤委員]

さっき言ったことと正反対になっちゃいますけど。「らしく」は大事だと思います。

[代田会長]

「男らしく」「女らしく」と言われたことで話し合うということですね。これからすると、例えば2ページの、「あなたは「男らしく」「女らしく」「男なんだから」「女なんだから」と言われたことがありますか？」という部分、この「男らしく」「女らしく」を取り払い、「男なんだから」「女なんだから」といった表現にする。

[松田副会長]

若い世代の方に、叱るときにどうやって子どもさんを叱るのかを聞いてみたいですね。

[林委員]

確かに、どうやって叱るのか聞きたいですね。

[代田会長]

意識調査の結果だと、結構言われているようですよね。

[松田副会長]

「あんたは男の子でしょ。もっとしっかりしなさい」とか。

[代田会長]

家庭では言われているんですよね。

[宮崎委員]

意識していても、出てしまいますね。例えばスカートを履いていて、がっつと股を開いていたりすると、言ってしまいます。男だったら全く気にしないのですが。

[松田副会長]

それはスカートを履いていないからですね。服装で求められる立ち居振る舞いというものがありますよね。

[宮崎委員]

ズボンなら気にしないのですが。

[近藤委員]

日本の文化を捨ててはいけないと思いますよ。海外に行っても、日本人の心というのは大事にしないといけないと思いますので。

[代田会長]

それはもちろん大事ですね。ただ、あわせて大事なことは、いわゆる不合理的な文化的、社会的な性差については、徹底してなくしていかなければいけないです。

[近藤委員]

それはそのとおりです。

[市川委員]

自分の意見としては、会長がおっしゃるように「男らしく」「女らしく」をカットするという事に賛成です。

ですが、「どちらが得ですか」ということを今の5年生に聞くことが適切な言葉かと疑問です。今の5年生の子ども達は、損か得かなどということは、余り論じなくとも認知するのではないかなと思います。

[代田会長]

そうなる、ここはどういう表現が良いですか。「女の子」と「男の子」。

[市川委員]

私はこの2ページはカットしても良いと思います。

[伊藤委員]

この部分は残しておいて、「どんな気持ちになりますか」というところで子ども達に議論してもらうのはどうでしょうか。それで子ども達自身が自分の結論として、こういうことは余り好ましくないという結論に達するような指導の仕方だったらいいのかなと思うのですが。

[市川委員]

そうなる、現場の教師が上手にそこを導いていけるかなと少し心配です。

[宮崎委員]

一番下のメッセージの部分はとても大事な言葉だと思いますので、この言葉はどこかには絶対に入れてほしいですね。

[松田副会長]

近藤委員も意見でお書きになっています。緑の枠のところですね。

[宮崎委員]

いい言葉とでも言いますか、これは残しておいてほしい。

[松田副会長]

もしこのページを残すとしたら、例えば「男なんだから」「女なんだから」と言われたときにどんな気持ちになりますか」との内容で議論させる程度にしたらいかがでしょうか。

[代田会長]

そうすると、後半の方は表現が気になりますね。「どちらが得だと思いますか」というような形になってしまう。

[松田副会長]

損得にしてしまうとおかしいかなと思いますよね。

[代田会長]

「男なんだから」「女なんだから」などと言われたらどんな気になりますか」というタイトル。下もそういったことで議論させる。

確かに言われる事実自体は結構あるのでしょうか。だから、言われたときにどんなふうに思っているか。全く何とも思わないかもしれないですし。

そうしますと、2 ページについては、「どちらが得」という形ではなく、「男なんだから」「女なんだから」と言われたらどんな気になりますか」というようなことですね。後半もそれで話し合ってもらおうという表現で。データは最新のものにするということですね。

それでは3 ページ、「男女共同参画社会って何？」というところですが、これもいろいろ御意見をいただきました。

確かにこの部分、少しわかりにくいですね。

大鹿委員が言われているように、献立を一緒に考えるのが参画で、出されたものを食べるのが参加という言い方のほうが、子どもにはすぐ入っていくと思います。具体的な例を出すと、よりわかりやすいです。

平林委員が言われているように、確かに4 ページの内容に対応していないようです。「食事のしたく」「ふろのそうじ」「トイレのそうじ」「せんたくものをほす」という具体的な表現になっていて、ところが次のところは

「食事の準備」「部屋の掃除」「洗濯」となっていますね。

[平林委員]

すみません、細かいところで。

[代田会長]

おっしゃるとおり、これは合わせたほうが良いと思います。「食事のしたく」じゃなくて「食事の準備」にして、「ふろ」と「トイレ」をまとめて「部屋の掃除」にして、それから「せんたくものをほす」ではなくて「洗濯」にしてしまったほうが良いと思いますね。そうすると、次のページでこれを見たときにわかりますね、対応しているから。

上の囲みの部分、男女共同参画社会の説明の表現は、易しくするというのは難しいですね。

[近藤委員]

「男女平等」という言葉が出てきていますが、これひっかかるんです。「平等」ってどういうことかと。

[代田会長]

これは、男女共同参画とほとんど同じというように理解して良いと思います。恐らく英語でいうとジェンダー・イコリティーです。だから、セックス・イコリティーでなくて、いわゆる社会的、文化的な性差、いわれない性差とでもいうんですか、それが解消されることが男女平等というふうに理解しています。

[市川委員]

私が書いた意見とは少し違いがありますが、3 ページ、4 ページの見開きの部分です。3 ページの上では非常に高尚なことを言っていて、小学生にわかるのかなと少し疑問に思うほどです。ですがその下は、非常に身近で家庭の小さなことを言っています。そして4 ページではもっと重たい内容、女性が働くことや指導的立場と言っている。この二つは左のページでは一切出てない。この3 ページ4 ページ自身が何を子どもに訴えたいのか、どういうことを議論してほしいのかということがやっぱり曖昧だという気が

してしまいます。だから、ここは何を訴えたいのか、何を子どもたちに話し合っしてほしいのかというところの方針を明確にする必要があるでしょう。

子どもから見れば、例えば指導的立場に女性が参画すると言っても、多分小学校 5 年生ではかなり解説を受けないとわからないでしょう。ここでいきなり女性が職業を持つことの意識と言われても、何を言っているのか理解できるでしょうか。お母さんが働く、共働きで家にいなくなる、で、家の中がどうなるというような形のことを思い起こさせたいからこういうふうにしているのか。ここの趣旨を明確にして、紙面構成を再構成する必要があるんじゃないかという気がしますね。

[代田会長]

なるほど。確かにわかりづらいですし、何が言いたいかわからないというのはありますね。

4 ページでそれこそグラフと関係があるとすれば一番上のデータですね。真ん中とか下は余り関連性がありません。いっそのこと、この二つをなくしたらどうでしょうか。そうしますと結構スペースがあいてしまいますが。

[松田副会長]

ただ、指導的立場にという点に関しては、最初の 1 ページ目で、野球の部分で指導的立場に変えるという話になっていますので、それを受けてここに入れてもいいのかなと思います。

[市川委員]

私の孫に、小学校 3 年生と 2 年生の男の子がいます。この夏に 1 週間預かったのですが、3 年生の子が、夕食が済むと率先して皿洗いをします。一切大人の手を借りずに、「僕が自分でやるから」と言っていました。親は、毎日帰ってくるのは 10 時過ぎです。ですから、ふだんは家庭のことをやることができない。そのかわり土日は父親が後片づけをやっているようです。それを見て、自然に男の僕がお母さんを助けなきゃというのが身についたように思います。

それを見ていて思ったのですが、3 年生でもお母さんが自分で仕事を負担していることを知っていて、自分が手伝わなきゃと思っている。そういうふうに考えると、もう 5 年生にこんなことを聞く段階ではないのではと

感じます。

自分の家庭がどういった家庭で、両親がどういう分担をしていて、それについて自分はどう思っているということを理解しているんじゃないかと思うんですけど、いかがですか。

[伊藤委員]

うちの家庭では、娘二人に関しては、私が台所に立っていると「何か手伝うことある」と必ず聞いてくれるんですが、息子はまだまだ教育が足りなくて、そこまで至っていません。ですので、掲載しておいたほうが、自分の生活を見返すときのきっかけになるのではないかと思います。今度大変なお母さんを手伝おうかなという気持ちになればいいかなと感じます。

[市川委員]

今ご意見がありましたし、これを残すなら、やはり女性にも負担が多いということをはっきり書いたほうが良いのではないのでしょうか。

[伊藤委員]

議論させたほうが良いでしょうね。

[市川委員]

議論するような形を仕掛けるような仕掛けが必要になるのかなと思います。

[代田会長]

今の状態だと、「おもにしている人」には「お母さん」がかなり入るのではないのでしょうか。

[市川委員]

そうですね。

ただ、父親にしてみればもっと大変で、夜遅くまで自分もこうやって仕事を頑張っている。父親の大変さという点も少しはここに出てきますが、それだけで本当に父親の大変さがわかるのか。

お母さんが目の前で大変なのはわかるけれども、お父さんは見えないと

ころでその苦勞をしていて、その結果がここにつながっているというところまで踏み込んで議論しないと、多分本当の部分が見えてこないでしょう。

[松田副会長]

難しいですね。

[平林委員]

これだけだと、平等というのからは少し外れていますね。

[代田会長]

どうしたらいいですか。

[宮崎委員]

家庭によって違う部分はもちろんあるでしょうね。私の給料は今振り込みなので、妻が子どもに言ってくれています。「お父さんが働いているから食べられるんだよ」と。それを言ってくれるので、子どもは手紙を書いてくれるんです。私が遅く帰ると「今日もお疲れさま」みたいな手紙が書いてあって、感動してしまいます。それを見たときには、明日も頑張ろうという気持ちが出てくるので、それは妻のおかげだと思っています。逆に、それを言ってもらえなかったら多分子どもはわからないと思います。

[市川委員]

多分、今の子育て世代の両親は、男は仕事、女は家庭ということを是とは思っていない。だけど、現実としてそれはそうではない。その議論をしないまま子どもに家庭の役割だけ議論させて、これでは表面的なことだけで、核心部分に至っていないのではと感じます。その背景にあるものまで突き詰めていかないと、本当の議論ができないと思います。

[代田会長]

5年生の親だと、何歳程度になるんでしょうか。

[伊藤委員]

40前後でしょうね。

[代田会長]

そうすると、お母さんの多くがパート等で家を出ている場合がありますね。必ずしも働いているのはお父さんだけではない。

[市川委員]

6割近くの女性は働いています。

[代田会長]

お母さんも働いて、お父さんも遅くまで働いているけれども、その上でお母さんは家事もやっているという現実はわかるのではないのでしょうか。

これは、この形のままいきましょう。

ただ、指導的な立場のグラフをどうするかですね。この後に指導的な立場のグラフを持ってくるというのは関連性がないですよ。

そうすると、むしろ1ページとか2ページで入れるスペースがあればそちらで出したほうがいいのかもかもしれませんね。

[平野主事]

大変申しわけありません。今回のアンケートで、この指導的立場についての質問をしておりますので、データがありません。

[代田会長]

では、この二つをカットしましょうか。代わりに何を入れましょう。

[松田副会長]

データを入れるのであれば、小牧市のデータではないかもしれませんが、社会生活基本調査というものがありますよね。その生活時間の違いのような部分はどうでしょうか。

[代田会長]

男性がどれくらいの時間働いていて、どれくらい家事をやっていて、女性もどれくらい働いてどれくらい家事をやっている、といった調査ですね。

[松田副会長]

そうです。

[代田会長]

そうすると、女性は働いている上に家事時間が非常に長いということもわかりますね。

[松田副会長]

一方、市川さんがおっしゃるみたいに、男性は非常に長時間労働だという部分も見える。

[代田会長]

それは良いですね。

また、4 ページに対する大鹿委員からのご意見で「一言コメント」を付けると良いというものがありました。「9割以上は主に女性」といった、こういうコメントをグラフにつけるとわかりやすいですね。見るだけでは、見て終わりですからね。

次に5 ページですね。

これはこのままでいいという御意見ですね。市川委員。

それから、伊藤委員からはワーク・ライフ・バランスについて追加してはどうかというご意見がありました。

「男だから、女だから」を削除する、というご意見が平林委員。そうですね、「男子だから」「女子だから」というのは取った方がいいですね。

伊藤委員、これをご説明いただけますか。

[伊藤委員]

日本の現状がどうしても、男性の方の長時間労働が原因で、家庭における役割で女性にかなり負担がいつているということになります。ただ、5年生だと難しいのかもしれませんが。

[代田会長]

難しいかもしれないですね。働いた経験がないわけですから。

[伊藤委員]

そうですね。

[代田会長]

でも、大切な視点ですけどね。

そうしますと、5 ページはアの「男子だから、女子だから」という選択肢を削除ということによろしいですか。

次の6 ページの写真ですが、これはもうページ自体が要らないというご意見が結構ありますね。市川委員、平林委員からです。

一方で大鹿委員、無意識な偏見が見直されてこういうのがわかりやすいとの声ありと。実際に5年生のご担当の先生からの意見ですね。

[大鹿委員]

すみません、このページありきで書いていましたので。

[代田会長]

削除もありですか。

宮崎委員から、美容師の男の人は普通にいるというご意見です。

[宮崎委員]

むしろ多いくらいですよ。最近は女性の美容師のほうが少ないんじゃないかと思います。

写真削除で良いのではないのでしょうか。

[代田会長]

そうしましょうか。では写真を削除ということで。

7 ページですね。これも、なかなか政治の場というものはイメージできないですよ。

市川委員、「どちらが優遇」を「ジェンダー・ギャップ指数の要点」というのはどういうことでしょうか。

[市川委員]

ジェンダー・ギャップ指数から、日本における女性の指導的立場の人が

少ない等の問題を提起したらどうかということです。

ただ、小学校 5 年生でここで議論できるかとなると、書いておいて申し訳ありませんが甚だ疑問ではあります。そうすると、先ほど松田副会長がおっしゃったような形で、女性に家事の負担が多くなっており、男性が少ない、海外はそれに比べて男性の家事時間が多いというような形の問題提起をするかですね。どこに提起を置くかですが、「優遇」というのも非常に抽象的で曖昧ですからね。

[代田会長]

わかりづらいですね。

[市川委員]

気持ちの上ではジェンダー・ギャップ指数での世界との比較を出したいのですが。難しいでしょうから、実際に日本の男女が偏った家事育児時間、それを世界と比べることでそのことを自覚してもらおう。

[代田会長]

結局、学校というのはいろんな場面で一番平等が進んでいます。だから、子ども達は余り男女不平等というものを感じていないでしょうね。

[市川委員]

ピンとこないですよ。

[代田会長]

そうです。意識せずに生活をしているんですね。ですが、実際に数字を見ると、職場とか政治の場ではまだまだ男性が指導的、主導的になっているので、それを意識させるということがこの趣旨なんです。ただ、難しいかなという気もしています。

[市川委員]

どこに主眼を置くかですけれども、そういう意味では小牧市の女性の市議会議員が 25 人中 5 人という部分を出して話し合うかです。その他の例であれば、区長とかも。

[代田会長]

それは良いですね。

[市川委員]

多分、学校の先生から見れば、曖昧で抽象的な問題提起よりも、具体的な事例があってそれについて話し合う方が進めやすいし、生徒も議論が噛み合うのかなと感じます。

[代田会長]

区長と、それから市議会議員。

[林委員]

区長さんの仕事内容を、5年生に理解できるでしょうか。

[伊藤委員]

子ども会に入っている子だと、子ども会と交流があることもあります。

[林委員]

子ども会に入ると、役員をする必要があるからと言って、子ども会のない地域も増えていますね。

[大鹿委員]

まだ市議会議員の方が分かりやすいでしょうね。区長となると、どんなことをしているかなということから始まってしまいますし。

[代田会長]

市議会議員ですね。職場ではどうでしょうか。

[宮崎委員]

職場も仕事の内容によって違うと思います。女性メインの職場というものやはりたくさん世の中にはあります。例えば製造業であれば、男性が大多数を占めていますけれども。

色々な場所で聞くと、女性が多い職場もあり、女性がリーダー的に指導している会社も当然中にはあると思います。

[松田副会長]

小学校や中学校の女性の校長先生はどのくらいいらっしゃるのですか。

[大鹿委員]

2人です。

[代田会長]

学校、特に小学校の場合は女性の教師も多いことを考えると、非常に少ないですね。そうすると、学校というのは、生徒とか児童レベルでいうと平等ですが、職場として考えると、指導的な立場は男性が多いということで、結構不平等なものですね。

何かいい案、数字はないですか。

[松田副会長]

難しいですね。優遇されているということと、例えば市議会議員、校長先生の指導的立場の比率が高い問題とは、ちょっとずれがあるんですよ。

[代田会長]

これは事実というより、感じている人が何%という意識調査ですからね。

[松田副会長]

気持ちの問題ですからね。ここで、「優遇」ということと「得している」ということが一緒という言い方をしているわけです。

[代田会長]

どうしましょう。なくしてしまいますか、ここ。

[宮崎委員]

ある意味、今は時代の変わり目になってきていることが企業にいるとよくわかります。若い社員も上になりたくないという人間が増えています。

管理職になると収入はいいのかもしれないけれども、つらいことも多い。言われた仕事をやっているほうが楽だという人も増えているのは事実だと思いますね。

逆に言うと、自分は指導したいという気持ち強い、食欲な人がいれば男性女性関係なく上に上がっていく時代になってくると思うんです。

[松田副会長]

降格願なんてよくあると聞きますね。

[代田会長]

どうでしょうか。

[宮崎委員]

世間のこういうことを伝えることは大事だと思うのですが、つなぎ方が難しいですね。本当に場面場面で全部違うので、一概にこれというふうには言えません。

[松田副会長]

あまり具体的、身近になり過ぎると、「自分のところは違う」となってしまいかもしれないですね。

[代田会長]

ではこれはこれで残しましょうか。もちろんデータとしては最新のものにして、表現をもう少しいろいろ易しい形で考えていきたいなと思います。

では次に、8 ページですね。

これは市川委員ですね。確かにここは丸投げしている感じですね。

[市川委員]

私が担当の教師の立場であつたら、何を話したら良いのか迷ってしまうと思いますし、せめて四つぐらいのテーマの中から議論を絞る等、ある程度まで提案して欲しいと思います。

[代田会長]

確かに例として何か挙げたほうが良いですね。これだけだと、恐らくここは話されないで終わりでしょう。

[宮崎委員]

「平等」という表現だと、本当に難しいと思います。

妻に、出産をしなくて親になれるって男はいいねと言われたことがあります。それだけは代わることはできませんし、そういった面で平等か平等じゃないかと子どもが聞いた際、その点では平等じゃないと思いますよね。

[代田会長]

例としてどんなことで話し合ってもらうのが良いでしょうか。

流れとして、まず学校という場では、平等というか男女差を全然感じないですよ。ただ、一歩社会に出ると、未だに結構男性優位な点があるということです。ただ、小学校 5 年生にしてみれば、そんなことはよくわからないという話になりますし、難しいですね。話し合うにしてもイメージがつかめないでしょうから。

[平林委員]

私はこの 8 ページは要らないのではないかと思います。小学 5 年生には難し過ぎると思います。

先ほどの市議会議員の関係もありますが、じゃあ市議会議員って何をやる人ですかというところから小学生に教える必要があるとなると、聞くほうがちょっと無理だと思います。

[代田会長]

そうしましょう。ではメッセージはどうしましょうか。

[宮崎委員]

言葉は難しいですけど、良いことが書いてあります。ここが全てだと思います。特に最後の「いろいろな立場や物の見方を知り」という部分です。

[林委員]

「できることを始めましょう」、これが一番大事ですね。

[代田会長]

そうしましたら、ジェンダーチェックはいかがですか。

具体的なご指摘がありますね。「ジェンダーチェックを最初の動機に活用しても良い」、最初にこれをやってもらうということですかね。

[大鹿委員]

「私ならここを最初にやるかな」と言われた先生がいました。

[代田会長]

それは良いかもしれませんね。

あと、これを見ますと松田副会長にかなり修正していただいています。これで修正していくかですね。

ダイバーシティというのも、今大事な言葉です。

[伊藤委員]

ですが、先ほどのワーク・ライフ・バランスと一緒に、まだ少し難しいのかもしれないと思いました。

[宮崎委員]

グローバル化する中では、ダイバーシティという言葉はもう当たり前の時代になってきていますね。ただ、認識が5年生はどうかと言われると、大人でもあまり認識していない人もいるでしょう。

[伊藤委員]

5年生に多様性を伝えるという点では、今後は、障がい者の方なども受け入れる広い意味で教育してもいいのかなとは思いますが。

[平林委員]

ジェンダーという言葉は、いつごろからあるのですか。

[代田会長]

ジェンダーは90年代ではなかったかと思います。

[平林委員]

ダイバーシティは最近ですよ。

[代田会長]

最近です。

[平林委員]

となると、やはりジェンダーのほうが良いのでは思うのですが。

ただ、会社の立場からいくと、ダイバーシティという言葉は本当によく使っています。いろんな方がまざった世界が一番良いと思います。外国人もそうだし障がい者も健常者もいる。そういう言葉というのは生きていますから、わかりやすい言葉だなと私は思っていますけれど、子ども、それも5年生ですからね。

[松田副会長]

ジェンダーは「性差」という意味に結構限定されてしまいますけど、ダイバーシティだとかなり広いですよ。性差や国籍、年齢、障がいのあるなしなど、広がってきています。最近ではLGBTもですね。

[伊藤委員]

ここで子どもたちに教えないと、教えられる親がいるのかということや、先生が教えてくださるのかと気になります。中学校の教科書には、ダイバーシティという言葉が載っているのかなとも思うのですが。

言葉だけでも、こういう言葉があるということを伝えるという意味でも載せておくと良いのかなと思います。

[宮崎委員]

これからの時代で「はばたけ未来へ」の意味が、こういう多様性という考えを知らせないのではいけないと思います。専門用語を覚えてくださいというのは難しいと思いますが、そういうことがあることを認識することだけでも大事かなという気はします。

[代田会長]

では「ジェンダー」と「ダイバーシティ」は入れておきましょう。

あとは、設問の細かな点については、松田副会長のご指摘のとおりで良いでしょうか。

それでは、その他ですね。

イラストは、確か小学校の美術の先生に描いていただいたんですよね。

[松田副会長]

古いイメージとありますが、私はこのイラストは良いなと思って見ました。

[代田会長]

結構時間をかけてオリジナルなものを描いていただいたので、このままでも良いのではないかと思うのですが。

[松田副会長]

そうですね、女の人の服装が少し古いかもしれない。

[代田会長]

ああ確かに。

「はばたけ未来へ」を「はばたけ、未来に向けて!」、これはいかがですか。

[市川委員]

お任せします、こだわっていませんので。

[宮崎委員]

今のままが言いやすいですね。

[代田会長]

ちょっと字数が多いかもしれませんね。では変更なしで。

ライフイベントクイズ、これはあった方が面白いですけどね。さっきのジェンダーチェックと一緒に、これが一番最初にあると良いかもしれない。

では、「はばたけ未来へ」については以上です。

(2) 小牧市職員への女性登用状況について

(3) 審議会委員及び行政委員会委員への女性登用状況について

[代田会長]

次に議題の(2)に入りたいと思います。

(2)、(3)と続けて、事務局から簡単に説明をお願いします。

[平野主事]

皆様にお配りしました資料2 小牧市職員への女性登用状況と、資料3 審議会等委員及び行政委員会等委員への女性の登用状況をご覧ください。

こちらは毎年皆様にご報告させていただいているもので、資料2は、私たち小牧市職員の人数や、そのうち女性の占める割合等を示したものになります。昨年度からの推移が載っておりまして、少々数字に変化があるところがあります。

また、資料3の審議会等委員及び行政委員会等委員への女性の登用状況につきましても、各課所管の審議会、委員会の委員に占める女性の割合等を確認いたしまして、非常に少ないところ、もしくは前年度と比較して減少しているところなどある場合につきまして理由などを尋ねている形になります。

こちらをご確認いただき、ご意見などいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

[代田会長]

ありがとうございます。

それでは、どちらに対してでも結構ですのでご発言ください。

[松田副会長]

一つ聞いてもよろしいですか。

消防職は、職員の方も含めて女性がゼロということだと思いますが、採用する予定等についてはどのようなものかというところを伺いたいです。

[船橋館長]

男性に限る等の条件はないはずですが、念のために人事に確認してみたいと思います。

【行政経営課へ確認したところ、「これまで女性の応募者がいた時もあるが、試験の結果、合格者がいない状況である」との回答でした】

[松田副会長]

男女雇用機会均等法で、男子のみというのはだめということは、若い人も知っていることです。市の募集も「男子のみ」などとは書いてないと思うのですが。

[平野主事]

実際に周りの市にも女性がいるところはあると聞いております。

[林委員]

女性消防職員は、事務的なことをメインで、火消しとか救急とか、現場にはまず出ないと思うのですが。

[松田副会長]

救急救命士は多いです。

[林委員]

救急救命士は多いでしょうけど、いわゆる火消しみたいな消防とかそういうのはどうなのでしょう。

[松田副会長]

出ているという話も聞きます。

[林委員]

そうですか。

女性が入ると、トイレや仮眠室から全部直さなければいけないため、とても大変だというのは聞いています。

[松田副会長]

それが一つネックになっているとは聞いていますね。

[伊藤委員]

安衛法、労働安全衛生法という法律の中で、女性がいる職場については、例えば仮眠施設などは必ず男女別にしなければいけないと決まっていますので、急遽女性を雇うと、慌ててそういう態勢をとらないといけないということはありませんね。

[代田会長]

ただ、ゼロというのは不自然ですね。

[林委員]

農政課の農業委員会もいつも話題になりますが、いつも女性がいないですね。以前にも農業委員はどうして女性がいないんだろうということで話題になりましたが。

[代田会長]

それでも、この表だけで見るとものすごく酷い状況かなという感じもしてしまいますけれども、こちらの 26 年度の完成版で見ると、全体としては少しずつ上がっているという感じですね。

(4) 平成 26 年度小牧市男女共同参画推進状況について（最終報告）

[代田会長]

では、次に資料 4 についてもご説明ください。

[平野主事]

はい。資料 4 は第 1 回審議会にて途中経過をご報告させていただきました平成 26 年度ハーモニーⅡの推進状況の最終報告です。

以前ご指摘いただいた部分を少々修正したのに加えまして、1 ページ目の一番上、女性委員の登用状況の数値を、最終的なものを掲載いたしましたので、ご報告させていただきます。

[代田会長]

これを見ていただくと、平成 26 年 4 月 1 日現在で、審議会等における女性委員人数が 273 で、女性比率が 30.0 です。行政委員会における女性委員人数が 5 名で、これが 12.8 です。その下に 1 年前の数字が載ってまして 27.7 と 7.9 ですから、上がってはいますね。ただ、もともとの数値目標が、前のハーモニーⅡの段階では、平成 25 年、2 年前に 35%いくという数値目標でしたので、そういう意味では足りないということですけど、ようやく 30%にいったかなという感じですよ。

皆さん、その他はよろしいでしょうか。

それでも、やはりゼロ%というのは何とかしなければいけません。そのままにしておくと、おそらく 5 年後もゼロのままでしょう。

これを進めるには、少なくとも改選のときに 1 人は入れてほしいと審議会が言っていたと伝えていただきたい。

[松田副会長]

資格が必要な委員もありますからね。農業委員なんかですと、土地を持っているとか。

[舟橋次長]

母体のところに女性がいる場合は、女性をぜひ委員にという働きかけは毎回こちらのほうからしておりますが、そもそも母体に女性がいなくてもあります。

[松田副会長]

医療関係も、例えば医師会とか病院長とかいうふうにメンバーが決まっています、だから病院長が女性にならないと入れないとかもありますね。

ただ、そういう委員会もあるけど、例えば自治体経営改革戦略会議などは女性を入れてもいいような会議だと思うんですけども。

[船橋館長]

そういう委員会等は、引き続き要請していきたいと思います。

[市川委員]

委員になる前の段階で、女性の育成をして、そこで候補者をつくらない

ことには上へつなげていけないですね。

[坪井係長]

そういう委員、女性リーダーになっていただけるような方を養成していくというのが、まなび創造館女性センターの一つの役割でもあるとは考えております。ただ、現在壁にぶつかっているところで、また皆様にご意見をいただけたらと思います。

4 その他

[代田会長]

そうでしたら、その他ですね。
また事務局をお願いします。

[平野主事]

本日皆様に机の上に配付させていただきましたA3横の紙とA4横の紙をご覧いただきたいと思います。こちらですが、前回審議会で少しお話をいただきましたハーモニーⅢの推進状況の報告書の案となります。来年度以降、また各課から報告をあげてもらいますが、その際、どのような様式を使うか考えた方が良いというご意見をいただいておりますので、今回案を作成させていただきました。

ご確認いただき、ご意見をお願いいたします。

[代田会長]

ありがとうございます。

前回の審議会の中で皆さんにご審議いただいて、この審議会としては、各課にいろんな報告を出してもらうのはもちろん良いのだけれども、重点目標を毎年しっかり掲げていただいて、それを推進して、年度末に結果というか実績の詳細を報告してもらおう。できれば数値目標も入れた形でやっていただくということをご提案いただきましたよね。

皆さん、ご意見はいかがでしょう。

[松田副会長]

一つ質問しても良いですか。

A4サイズのほうでいうと、それぞれの項目の右下に男女行動参画の視点という部分がありますけれど、これはどういったイメージを持っていらっしゃるんでしょう。

[坪井係長]

こちらですが、各課で重点目標を設定していただいたときに、それが男女共同参画の視点としてはどれぐらいのレベルにあるものなのかという点を各課で指標として取り組んでいただこうということで設定しました。各課にも、通常の業務の一環ということだけではなく、男女共同参画の事業にもなるということを少し気持ちとして持って取り組んでいただけると、少しは市役所の中でも男女共同参画という意識が浸透するのではないのかなというようなこともありまして、取り入れてみてはどうかなと考えて追加いたしました。

[松田副会長]

評価なんですね。

[代田会長]

その他特にありませんか。

それでは、事務局にお返しします。

5 閉会

[船橋館長]

今日は長い時間、活発な議論をありがとうございました。

これをもちまして、第2回小牧市男女共同参画審議会を終了させていただきます。ありがとうございました。